

【日本の大学】第55回——神戸市外国語大学：国際的視野で活躍できる人材育成

神戸市外国語大学は、「広い国際的視野に立って活躍できる人材を養成する」との主旨を掲げて、1949年に設立された日本で唯一の公立外国語大学である。神戸は古くから外国との交易をおこなう日本で有数の港町である。そうした地理的、歴史的な条件を踏まえて、神戸市外大は、設立の目的として外国語や国際文化に関する実践教育や理論研究の中心となり、市民からの大学教育に対する要請に応じて、文化・教育の面で、地域社会・産業の発展に貢献し、高等教育や学術研究の向上に寄与することを掲げている。



外国学研究所

夜間教育にも力点

外国語学部だけの単一学部であるが、外国語学部は昼間と第2部（夜間）とに分かれている。昼間は、英米学科、ロシア学科、中国学科、イスパニア学科、国際関係学科の5学科があり、第2部には英米学科がある。

以下、神戸市外国語大学のホームページなどから大学の現況をみていこう。

大学の始まりは第2次大戦直後の1946年に設立された神戸市立外事専門学校である。3年後の49年に神戸市外国語大学に昇格した。その時は外国語学部には、英米、ロシア、

中国の3学科が置かれた。

1950年には短期大学部が併設されたが、5年後には廃止されている。1953年には夜間部（第2部）の英米学科が新設された。昼間学部では1962年にイスパニア学科が加わり、67年には大学院の外国語学研究科（修士課程）が設置されている。

1986年には六甲地区から、神戸研究学園都市内にある現在の学舎（神戸市西区学園東町）へと全学移転した。翌87年には学部にも五つ目の学科である国際関係学科を増設している。

大学では、教育方針と特色を以下のように示している。

外国語教育に関しては、それぞれの外国文化の総合的研究に必要な諸科目を配置して、語学並びに文化相互の有機関係を生かした語学教育をするように配慮している。単なる技術習得に終わらず、深い知識を備え、国際的視野を持った人材の養成を目的としている。

カリキュラムは、1、2年次は、学科ごとの専修語学と、もう一つの兼修語学（第2外国語）を必修とし、これらの語学に加えて、それぞれの学科における基礎的知識を修得する学科基礎科目と、自分の関心、興味を深め教養を育む全学共通科目（人文、社会科学、自然・人間科学の各領域からそれぞれ少なくとも1科目）を履修する。

国際関係学科は4年間の語学教育と国際関係に関する専門的な教育を元に、後半2年間は論文指導を受け卒業論文を作成し、語学を身につけた国際人の養成を目的としている。

同学科を除く4学科（英米、ロシア、中国、イスパニア）では、2020年度までに入学した学生は、3年次からもう一つの専門の「コース」を選択し履修していた。3コースがあり、主として語学・文学について専門知識を深める「語学文学コース」、法律・経済・商業など社会科学分野に重点を置く「法経商コース」、広範かつ総合的に文化を研究する「総合文化コース」に分かれていた。



様々な国から約 100 人の留学生を受け入れている

新たなコース制を導入

2021 年度以降の入学生については、コースを五つに再編するとともに、2 年次からコース制を選択するようになった。5 コースは、「語学文学コース」「国際法政コース」「経済経営コース」「多文化共生コース」「リベラルアーツコース」である。英米、ロシア、中国、イスパニア学科の学生は、この 5 コースから一つを選択する。国際関係学科では「語学文学」を除く 4 コースから二つ（主専攻・副専攻）を選び、それぞれに設けられた科目を履修する。

新コース制を採用したのは、語学教育と専門教育を両輪とする開学以来の教育体制をより鮮明にし、現代社会のニーズに適応した人材を育成するのが狙いだ。

英米学科、国際関係学科では第二外国語としてロシア、中国、スペイン、フランス、ドイツのうちいずれか 1 科目を選択する。ロシア学科、中国学科、イスパニア学科は第二外国語として、英語を必修とし、ロシア語、中国語、イスパニア語のほか英語においても相当高い程度の教養を身につけられるようにしている。

英米学科を例にとると、広く国際的な場で活躍できる、確かな英語力と幅広い教養と

を兼ね備えた、真の意味で「実力のある国際人を育てる」ことを目標として掲げている。少人数クラスによる高度な英語の運用能力を養成するとともに、英語圏の言語・文学・文化・社会に関する専門知識の習得を目指す。また英米に限らず国際社会における異文化間理解・コミュニケーションに必要な視点・スキルを身につけると同時に、異文化に対する理解を深めることで、自分たちの文化を新たな視点で捉えなおすことのできる人材を養成する。少人数のゼミでは、専門分野のテーマについて研究し、論文にまとめ、発表する能力を養成するための指導も行っている。

また、留学制度の充実の一環として、派遣留学として短期・長期の留学で取得した単位を大学の履修単位として認めることで、留学しても4年で卒業することが可能である。



図書館

特色ある露・中・西学科

ロシア学科は、専門的にロシア語が学習できる数少ない場となっている。英語と違って多様な語形変化を持った言語なので、まず1年次にそれに慣れる必要がある。1年次の授業はアルファベットの学修から始まり、ロシア語の正確な発音と基礎文法の定着を図り、初歩的な会話練習を行う。2年次は文法理解を深めるとともに、定型表現を習得

し対話能力を養う。3年次では、多様な分野のテキストを素材に、ロシア語を通じた世界の見方や異なる文体や修辞法を学習する。4年次では専門的なテキストの読解力、ならびにプレゼンテーションや交渉などに必要な自己表現力・対話力を強化する。

中国学科では、一貫して実践的な中国語教育を重視、近年、国際的な言語としての重要性が高まっていることを踏まえ、激動する中国の社会情勢や経済・文化の動きに即した使える中国語の習得を教育目標の第一に置き、中国および華人社会を含む中国語圏を中心とした国際的な視野で活躍できるスペシャリストを養成する。1、2年次において、中国語ネイティブ教員による少人数授業を含め、発音指導を徹底的に行う。その後、中国に関する専門知識の習得、高度なコミュニケーション能力の養成、国際的な研究・教育機関との連携などを通じて高度な中国運用能力を養成していく。

イスパニア語（スペイン語）は、世界20か国の公用語として用いられ、約4億人もの人々が使っている極めて国際性の高い言語である。ネイティブの専門教員からシャワーのように浴びることで、あいさつに始まり、自分の主張をしっかりと持ち、それを自分の言葉で表現することが求められ、学科に属する誰もがイスパニア語をマスターしている。時流に合った文献、ビデオ、音声教材など各種教材が充実しており、最新のコンピュータやオーディオ教室を使って、効果的に言語をマスターできる環境が整っている。

留学面でも、スペインのアルカラ大学、オルテガ研究センターなど五つの大学と交流協定を結び、スペインの大学で取得した単位がそのまま大学の卒業単位となる単位互換制度を採用している。

夜間の第2部英米学科は、昼間働いている学生のための貴重な存在であり、英語の実力養成には昼間学部同様相当厳しいカリキュラムが組まれている。また図書館司書・学校図書館司書教諭課程が設置されており、教育内容は充実したものとなっている。社会人のための特別選抜も行っている。

大学院外国語研究科には、英語学・ロシア語学・中国語学・イスパニア語学・国際関係学・日本アジア言語文化・英語教育学の7専攻の修士課程と、言語・文化・国際社会の3コースからなる文化交流専攻という博士課程が置かれている。

留学を計画している学生や、日本に来て学ぶ留学生の支援、留学生と在學生との交流活動について支援しているのが国際交流センターである。語学試験や各種資格取得の対策を講じる学生への情報提供も行っている。

海外から留学してくる学生に対するサービスとしては、語学習得に効果的な、レベルに応じた総人数制クラスで、日本語能力の向上を目指すことができる。日本人の学生がパートナーとなって、外国人留学生の友人となり、日本で不安なく楽しく留学生活が送れるようにサポートする。さまざまなクラブ活動があり、留学生も参加することができる。

交換留学生に対しては寮として法人借り上げたアパートを提供している。

外国人留学生数は21年5月現在、男性37名、女性70名の計107名、このうち中国人が91名（うち7名はオンライン留学者）である。コロナ禍によって新規入国が禁止されてきたため、留学生数は全体として減少傾向だが、神戸外大の場合、大学院生が大多数で、日本国内の日本語学校や大学から進学してくるため、大きな変動はないという。

学生数は、学部生が2105名（うち男性701名、女性1404名）、大学院は162名（男性57名、女性105名）、教員は男性50名、女性27名の計77名である（2020年5月現在）



学生食堂

学長は田中悟氏である。関西学院大学経済学部卒、経済学博士。神戸市外国語大学専任講師、助教授、教授、副学長・理事、学部長を経て2021年4月から現職。専門は産業組織論、競争政策である。

文：滝川 進

写真：神戸市外国語大学